

目的 女子短大家政科における住教育の充実は、近い将来住宅市場での主体的対応が必要となる彼女たちの、住意識を向上させる上でも早急な課題であることを前報で指摘した。本報では、講義「住居学」の役割・内容及び方法について、履習前後の意識・関心の変化を通して模索検討することを目的としている。

方法 大阪府下の「住居学」を受講した(通年、設計整図を除く)女子短大生84名、直接配票・直接回収による自記法で、昭和61年4月及び62年1月にアンケート調査を実施した。

結果 (1)「住居学」への反応 履習後「別に何とも思わなかった。」が6割を占め、その内9割は履習前も同様の反応を示していた。また履習前に受動的反応あるいは消極的反応を示した者で、履習後積極化した者は2割にとどまる。履習後の反応は、講義内容を「実生活に応用できそう。」と判断し得るか否かに拠るところが大きい。(2)講義内容への反応 内容には全体的にある程度興味をもてたものの、講義内容自体は履習前の予想と必ずしも一致していなかったと約8割が指摘している。興味・関心の対象は、上位3項目を「室内装飾」、「住宅取得」、「平面計画」が占め、履習前後一貫した傾向である。(3)「住むこと」への関心と実践 関心は、向上層と無変化層とに二分し、「住居学」に対する履習後の反応と相関する。また、「広告を細部までよむ」、「住まいについて話す」等、知識定着にともなう実践が少なからず期待できる。(4)まとめ 住居学の講義評価は、履習前の興味・関心に左右されるところが大きい。また講義で新たに関心をもち、更に実生活面への応用を可能にするには、実習・見学をも含めた多面的な講義展開の検討も必要であろう。